

# 転換期の大学と経済学・貿易学

—神大経済学部の変遷と展望—

経済貿易研究所主催

2012年12月5日（水）10：00～12：00

神奈川大学1号館5階501号室

池上 和夫（神奈川大学経済学部教授）

大林 弘道（神奈川大学経済学部教授）

中野 宏一（神奈川大学経済学部教授）

〈主催者挨拶〉

的場 昭弘（神奈川大学経済学部教授・経済貿易研究所長）

〈司会〉

兼子 良夫（神奈川大学経済学部教授）

【的場所長】 朝早くからお集まりいただきまして、ありがとうございます。経済貿易研究所で昨年からお辞めになる先生方に、過去のさまざまな出来事、またはそれぞれの研究分野での業績等について、私どもが聞いて、記録するという、こういう座談会を設定しました。これはなかなか、自分たちで言うのはなんですけれども、いい企画だと思っております。昨今、だんだん若い世代が増えていまして、研究が継続していかない。特に伝統ですよね。神奈川大学には神奈川大学の長い伝統がありまして、それを何らかの形で財産として残しておきたいというのが、私たちの最大の目的です。

コンフェッションという、告白という言葉がありますけれども、告白というのは、ヨーロッパの言語の意味から言えば、自説を語るというのがコンフェッションだと思います。今日は大いに告白というか、コンフェッションしていただきまして、自分たちの学問がいかにこういう意味で正しいんだということを主張していただきたいと思っております。私

たち、残る後輩たちはそれを学びまして、神奈川大学の今後の発展に尽くしたいと思いますので、本当に忌憚のない、批判で大いに結構です。若い人たちに対する、学問に対する批判があれば、私どもにとっては大いに結構なものですから、そのあたりを中心にお話なさっても結構です。そういう意味で、ここでは、ここで終わるんじゃなくて、次の世代を残したいということで、大いに激論を戦わせてください。それでは、兼子先生、よろしくお願いします。

【司会】 今回の座談会のタイトルは「転換期の大学と経済学・貿易学—神大経済学部の変遷と展望—」となっております。先生方のお手元には、ご参考までに『神奈川大学五十年小史』と先生方が本学にご赴任なされた当時の「教育課程表」と「専任教員表」のコピーをそれぞれ用意させていただきました。これらをご覧になっていただきながら、研究、教育ならびに大学行政をご先導なさってこられた、お3人の先生方に、本学経済学部で議論されてきたことや、ご自身の研究、教育ならびに大学行政に携

われて思うことなどを、的場先生からお話がありましたように自由にコンフィッションしていただきましたと思います。

それでは、始めさせていただきます。初めに、ユニバーサル化された転換期の大学のありようを象徴するかのような物議を醸しました、田中（前）文部科学大臣の大学設置基準をめぐる言動についてお伺いしたいと思います。本学に奉職された順に、まず池上先生、いかがでしょうか。

### 大学設置基準をめぐる大臣発言について

【池上】 私も大それたことは言えませんが、学長室から日本私立大学団体連合会等による平成24年11月6日付の「緊急声明」に関係する資料をもらってきたので、手元にこういう資料があったほうが話しやすいと思いますので、これをもとに話を進めます。

田中（前）大臣という、個人のキャラクターの問題も恐らくあると思いますが、ああいいういわばイレギュラーな発言がありました。ただ、その内容につきましては、皆さんご存じのとおり、大学数が、現在4年制大学で780ぐらいあるなかで560とか570が私立大学ですが、私立大学の半分近くが定員に達せず、4割方ぐらいが赤字であると言われています。この赤字については、大学の財政が学校法人会計基準という特殊な会計基準を持っていますから、赤字が少しつくりやすいところがありますが、それにしても、大きな数字ですよ。

そういうところは、田中（前）大臣も前から知っていて、にもかかわらず、どんどん大学がつけられていることはいかなるものかという発言だったと思います。確かにあまり深く考えて発言しているとは思えませんが、何となく当たっているところもなきにしもあらずだと思います。しかし、最終的にはご存じのとおり、3大学とも認可されることになったわけです。お手元にある「緊急声明」は、私立大学団体連合会、すなわち、神奈川大学が所属する私立大学協会、他に大手が入っている私立大学連盟でありまして、もう1つ、私立大学振興協会があるんですが、この3つの団体の共同声明という形で出ています。

この共同の声明には、言ってみれば、4つの柱が



出ております。抗議文としては、要するに大学設置・学校法人審議会は、大学の質保証の根幹を担う審議会であって、大学関係者の叡智を集めたものである、それについては尊重されたい、というのがいわば前文です。

2段目には、田中（前）大臣が、この審議会は、仲間内で審議をやっている、そのことが安易に大学の設置を認めることになっているのではと言ったことに対して、極めて専門的かつ高度であるから仲間内での審議にはあたらないということです。さらに、手続き的にも問題ないとするのが3段目でして、4段目には、今回の「法制上許容されるのか否かはなはだ疑問」と書いてある。つまり、今般、文部科学大臣が審議会の判断と異なる決定を行い、「かつ、その判断が予め示された設置基準にない事柄を理由とするものであれば」ということでして、この辺が1つの大きなポイントです。

ご存知のように、後で田中（前）大臣が撤回されたわけです。撤回されるぐらいだったら、最初から言うなという気持ちがないわけではありませんが、しかし、ちょっとやり方は父親似と言いますか、強引なところがあり総スキャンダルを食ってしまいました。

ただ、何となく一般の国民の中にも、ちょっと大学はつくり過ぎではなかろうかと考えている人もいます。さっき言ったような赤字や定員に対することがよく新聞で取り上げられますからね。ですから、一般的な国民感情としては、おかしいことを言っているのではない、ということなのかも知れませんが、大学としては、大学設置・学校法人審議会が粛々と法令・省令に則ってやってきたことですか

ら、いかに最終的な権限を文部科学大臣が握っていたとしても、一切それまでの過程を無視して行うことはいかがなものか、というのはこれはこれとして私は筋が通っていると思います。

だから、私は別に田中（前）大臣のやっていることを全面的に否定はしませんが、いささか勇み足があったと思います。今後恐らく1つの問題提起みたいな形で受け止めていくことになると思います。ただ、専門委員の中に、要するに民間の方をどんどん入れるべきだという話が出てきています。そういうこともあるかも知れませんが、それだけで済む問題では決していないのであって、そんな簡単なことではないと私は思っています。

**【司会】** 続きまして、大林先生いかがでしょうか。

**【大林】** 田中（前）大臣についての見解は、池上さんの言ったとおりです。ちょっと違う角度から見ると、戦後、新制大学からこんにちのユニバーサル大学に至るまでの大学の在り方の中で、常に「改革」ということが叫ばれてきたんです。その改革の改革たるゆえんは、高度成長時代を象徴して、大体は拡大ですね。つまり、改革というのは、新制大学を拡大していくということでした。それが日本経済大国化とか、少子化等々、そして大学進学率の上昇ということで、ユニバーサル大学になってきた。そういう中で、従来の拡大というのは、もう少し見直さなければいけないというのが、「大綱化」以降の大学の改革の大きな流れだと思うんですね。

そのときに、文部科学省がどういう政策を取ったかというところに、焦点を当てると、これは極めて私なりの見解ですが、そのときに、大学を競争させて、向上させるという、そういう方法が大体定着してきたのだと思うんですね。その場合、私から見ると、大体産業政策と同じで、既存の大学自体が自己改革をしていくということは、当初の期待だったけれども、とても大学は、ことに新制大学のさまざまな理念というのは、文部科学省から見れば、障害になっていて、自己改革は難しいと。だから、新しい大学をつくって、既存の大学と競争させて、しかるべき大学は淘汰していくという政策を取っていたわけです。これは産業政策と同じです。

そういう過程で、当然大学の中では競争に敗れる

大学があって、その処理については、金融政策と同じで、金融機関の破綻処理と同じようなやり方をしていくというのが、基本的には底流にあったし、財界から、大学政策に対する要求というのはそういう路線できている。それに文部科学省が抵抗しながらも受け入れていくという歴史だったと思うんですね。しかし、大学という分野に新規参入を増やしながら、破綻処理をしていくという、そのやり方が大学政策には徹底しなかったということです。こんにち大学が、国民の目から見ると、どんどん増えちゃっていて、われわれから見ても、いかがなものであろうというような大学まで増えている。現実の結果としては、先ほど指摘されたように、経営困難な大学がますます増えてきているということだと思うんですね。

ここで私が個人的に危惧するのは、今度、申請、認可を厳格化するというようなことでは、解決の展望というのは必ずしもないということです。こんにちの大学に課せられた課題は、現在のそういう競争と破綻処理みたいな流れをどのように克服して行くかということです。

本来、ユニバーサル大学になったら、もっともって大学進学率は向上していいはずなのに、向上していないわけだし、私はそれこそアジアに開かれた大学になれば、日本の大学の入学者が少ないなんていうことは、悩む課題ではほとんどないと思いますけれども、いろいろなことで入学者の確保の争いをしているということなんですね。

ですから、今、文部科学政策に対して求められるのは、国民の、あるいは21世紀の知識基盤社会とかと言われている、国民すべてがさまざまな専門性などを通して、知識を高めなければいけないわけですから、大学の国民に対する責務というのは非常に大きいと思うんですね。それに真に応える方向に、今回の問題が行くかどうかというところが要だと考えています。

ですから、田中（前）大臣がそれを承知で、あえて政治論としてのくせ球という変な意見を言って、それで世の中の視点を引き付けて、それでまた意見を変えていくというような、深謀遠慮としてやったら評価できますけれども、そうでもなさそうだし

う感じがしますから、たまたまやっちゃったという感じでしょう。(笑) だから、希望と危惧があります。以上です。

【司会】 ありがとうございます。中野先生、いかがでしょうか。

【中野】 今、田中（前）大臣の発言に対して、池上先生が問題提起をしたという、そのことは間違いないと思います。しかし、そこにどのような問題があるかということをお大林先生が結構詳しく説明してくれました。私は個人的に率直に言いますと、本人の意欲と教育心があれば、誰にでも高等教育は受ける機会を与えたいと思っているんです。これは基本です、私の。それがまず大前提ですね。具体的に言いますと、このところ目を覆うばかりの経済不況でありまして、大都市圏の大学へ進学できない高校生が大勢いるわけですから、地元の大学で自分に合う学部・学科に進学できるようにしてあげたいと、こういうことがあります。

ちょっとモデル的に言えばですけれども、大卒でなくても優秀な人材はいくらでもいるんですよ。ちょっと言い過ぎ、あるいは考え過ぎかもしれませんが。すると、大卒が上で、大卒じゃない人は下なんていう風潮なんていうのはとんでもないことでありまして、私はそういう風潮も非常に恐れるんです。

大林先生が具体的に言ったのですけれども、私は問題点があることは知っているけれども、枠組みで言えば、社会が必要でない大学は、企業と同様に市場から撤退するはずですよ。そうさせるべきです。妙な補助金とか、個別保障のようなことをやるんじゃない。ただ、私が今、申したことは、医学部とか歯学部、薬学なんていう分野というのは、大学教育と職業は直結していますから、これはまた別枠なんですよ。これは規制が必要だと思っています。

そんなことで、私の基本は、本人の意欲と教育心があれば、誰でも高等教育を受ける機会を与えたい。これが私の基本的なスタンスです。ちょっと乱暴な部分を含んでいるんですけどね。

【司会】 ありがとうございます。それぞれのご意見の中に、転換期の大学が置かれている現状、ならびに高等教育政策に関するお考えの片鱗をお伺い



きたものと思っています。

さて、次は、先生方がご奉職なされたころの経済学部を思い出していただき、当時お考えになったことや先生方のご専攻の歴史などをご自由にお話いただければと思います。それでは、池上先生から順にお願いいたします。

### 奉職時の神大経済学部を顧みる

【中野】 年寄りから順番にね。(笑)

【池上】 といっても、これはあいうえお順で、知っているとおりの、この3人はほぼ同じですから。年齢がね。ただ、専門が違うので専門の話になると、少し違うと思う。けれども、当時、私どもが経済学部に入ったときの雰囲気や思いやなんかは共通しているんじゃないかという感じはしております。

われわれが昭和51、52年に経済学部に入ったときは、ご多分にもれず本学もかなり厳しい学園紛争と言いますか、学園闘争と言いますか、そういうものがありました。一番激しい所は既に終わっていたのですが、まだ後遺症と言いますか、学生諸君は元気なところがありましたから、ピークは過ぎたとはいえ、その名残りがまだあった。かなり騒然としたところもありまして、試験もほとんど定期試験が行えず、レポートに変えていました。しかも、学生が列をなしてレポートに変えることについて署名運動に署名するという、そういう時代の中で、今でも考えられないとにかく大変な時代でした。

このことは共通の思いとして、恐らく後で出てくると思います。これは司会者の兼子さんにもらった資料を読んだら、当時の教員スタッフは、30名

ぐらいであることがわかります。教授会のメンバーにも、学生の行動に対してどういうふうに見るかは、他大学でもあったように見解の相違から、必ずしも一枚岩の学部運営がなされていたわけではありませんでした。われわれとしては、同じ年代ですから、大体同じような教育を受けて、大学も出てということになりますと、当時の激しい運動も知っているわけですね。知っているどころか、学生時代活動している人がいたんじゃないかと思うのですが、しかし、教員となって経済学部に入ったときは、これはなかなか厄介なところに入ったなと感じておりました。

少なくとも教員サイドに、いろんなことでいろんなフリクションがありますと、学生に影響してくるんです、最終的に見ますとね。だから、問題点は問題点で指摘して、お互いに切磋琢磨しなければならぬことは、当然ですけれども、同じ学部のスタッフとして、誤解とか曲解に基づくものを含めて、お互いに変な感情を持つことは好ましくないと思っておりました。そういうことからすれば、われわれ若い連中が良い雰囲気を作ることに少しは手助けになるように、できることをやろう、そういうことですね、最初の段階は。恐らくそこら辺のところは皆さん、共通だと思います。本学での初発の印象はそういうところでした。

私はちょっとだけ皆さんより神大に来たのが早いんですが、今でも鮮明に覚えているのは、当時、経済学史を担当していた吉田静一先生という方がおられたんです。吉田静一先生は、いつの教授会だか、覚えていないのですが、退任の挨拶をされたことがあるんですね。実は他の大学、確か東京経済大学に移られたのですが、あからさまな言い方はしていませんが、あまり学部の雰囲気がよくないので面白くないと。そういう趣旨の発言をされました。それから、口に出さなくても面白くないというふうにいる先生が何人かおられたように私には感じられて、これはちょっとまずいと、後で話が出ると思いますが、ちょうどわれわれ3人は同じ年ですし、同じ時期に入ってきましたから、この3人で語り合って、雰囲気をいいほうに持っていくための行動を起こしました。大したことはありませんけれ



ども、そういうことがありました。

【大林】 若手、名称を言ったほうがいいでしょう。

【池上】 若手のね。

【大林】 若手教員……。

【池上】 バカテじゃないか。(笑)

【大林】 そういうのを公につくった、学部内に。

【池上】 われわれが中心、3人ね。

【大林】 若手教員懇話会。そんなような名称ですね。

【池上】 少なくとも私どもはそういう考え方で行動していったということもありました。今日、この3人の話ですから言いますけれども、生まれも育ちもキャラクターも全部違うんですけれども、それなりに仲がいいんですよ。違うんだと言う人もいるかもしれないけど。(笑) 仲良くやってきたんですよ、ずっと。

【大林】 結局、当時の神奈川大学経済学部という体験を共有しているかだね。

【池上】 そういうことだよ。私の話はそこら辺でやめて、また。

【司会】 ありがとうございます。それでは、大林先生、いかがでしょうか。

【大林】 直面する事態は同じだけれども、表現が違うということで、繰り返しのようになりますけれども、当時、池上さんが5月、僕が10月という変則的な就任でした。ここに問題性があるわけですよ、既にね。なぜそういう時期なのか。これは要するに人事が進まなかったということです。学部内対立によってね。それはなぜかというのは大問題なんだけれど、当時神奈川大学全体としては、有名紛争

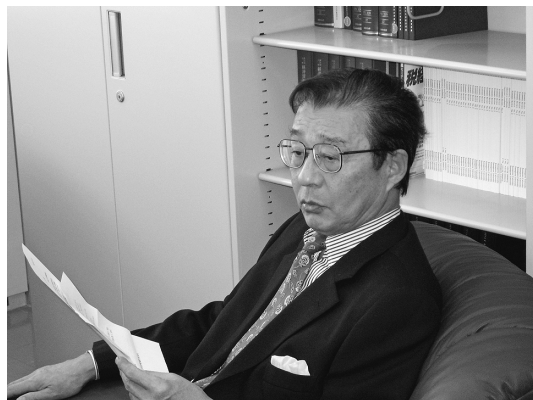
校ですよ。そのため、大学財政も非常に厳しい時代があったのです。それで、これは大変だという思いがあったわけですけどね。それゆえ、その紛争の大学に自分が奉職していくという意味を考えざるを得なかった。

当時の神奈川大学は私立大学としては、授業料その他、学費が安かったんです。ですから、そのときの神奈川大学の入学者の特徴として、地方の国立大学と神奈川大学を併願する受験生が多い。しかも、大学の方針として、全国から受験生を集めるということで、こんにちまで続く地方試験とか、それから当時、私立大学としては異例の大きな寮があったんです。そういうものと、給費生の試験などですね。だから、地方の優秀な学生が来ていた。このことは卒業後の活躍において、上場企業の役員、社長数などは、いわゆる偏差値格差から見る以上に、神奈川大学の位置はこれまでは非常に高かった。

そういう意味で、紛争が激しかった原因の1つは、学生が優秀だったということです。地方出身、それもあった。だから、僕は神奈川大学の紛争というのは、単にただ大学のやり方がまずかった、あるいは、それまでの紛争前までの大学の経営方針、あるいは教学の方針がまずかったという問題のもちろんあるんですけど、それ以上に現代的な問題というか、そういう優秀な学生が大学に来て、ある種満足ができない、あるいは社会の問題に対して敏感に反応するという側面があったと思うんですね。そういう意味で、神奈川大学の紛争というのは、単なる事件とか、不始末じゃないと思います。そういう部分があったんですね。

その紛争の影響がひどかったというのは、僕が一番印象的に当時感じたのは、学生が就職活動をするでしょう。今でいう「シュークツ」だけでも、そのとき、話題の最初に、「君の大学は随分紛争が激しいね」と、これで始まっちゃうわけです。それが一段落しないと通常の面接に入れないという、そういう問題ですね。そこからどうやって脱皮するかというのが、その後の大学の苦しみです。

そのときに、今池上さんが言われたように、学生対応で、教員の中に分裂があって、神奈川大学の再生に、ここからは僕の見方だけでも、教員組織が



有効な働きをしなかった。そのとき、職員層が基本的には再生を担っていくという経過があるんです。その自負がこんにちまで職員層の自負でもあるんですよ。そこにはもちろん「是非」の問題があると私は思っていますけれどね。そうなんですけれども、そういうところがあるんです。

だから、われわれ教員としては、教員の分裂状態とか、あるいは対立状態、そういうものの克服というのをどう考えるかというのが大事な問題なのです。だから、あくまでも教員は研究、教育を通した共同性というか、お互い手を携えて発展させるという視点がどうしてもなければいけない。それをどうやって築き上げるかというのが教員組織の最大の課題だというふうに、その当時はそんなに、自分なりに整理された考えを持っていなかったけれども、不安といろんなことで、悩みの中で過ごしてきて、そうだというふうな思いになってきました。ですから、それでこそ紛争からの大学の再生の中で、教員のほうで提起したのは、これは長倉保先生という先生が困難な中で、理事長代理になり、学長代理になりというような中で、提起した問題だけど、学生と職員と教員の三者の協力の中で大学を再生していくという路線を、今後ともさらに追求していかなければならないという教訓を残しているんじゃないかというふうに思います。

個別の、池上さんも個別の財政学の問題は言わなかったのも、それはまた後で言おうと思いますから、僕も科目については後にいたしまして、一応それだけです。

**【司会】** ありがとうございます。それでは、中野先

生はいかがでしょうか。

**【中野】** 大林先生のお話を聞いていて、思い出しましたよ。私が奉職したころは、神奈川大学の学費は20万円ほどで、幼稚園の年間の学費より安いという噂も、よく言われていました。もう1つは、私の学生時代の経験なのですが、極めて優秀な学生と言うと、神奈川大学の学生が出てくるものだから、これは何なのかなと思っていたら、その神奈川大学に奉職したんです。例えば、私は学生時代に懸賞論文を書いたんですね。当時ものすごい懸賞金なものですから、大勢の学生が応募して、いわゆる旧帝大をはじめとする国立大学の学生に加えて、若干、早稲田・慶應の学生は受かっていますけれども、そこに神奈川大学の学生が受かっているんですよ。それで一緒に合宿をやったことがあるんですよ。「えっ、神奈川大学というのはどんな大学なのかな」というのが、私の奉職前の印象です。

奉職してから気がついたのは、今、大林先生も池上先生も指摘されたような紛争ですよ。学内で死者も出ていますからね。暴力事件が目に見えますよ。目の前ですごかったですよ。

少ししたら、私がその大変な神奈川大学の学生部長になってしまった。学内には外人部隊（注、他大学の学生の意味）が来ているわけですよ。学生運動のね。

**【大林】** 外人部隊と言うと、本当に外人だと思っちゃうから。（笑）

**【中野】** そうかそうか。

**【大林】** それじゃあ、他大学という意味だから。それを注をして入れないよ。

**【中野】** シリアとかレバノンのあれじゃないですよ。（笑）大学祭のときには、学生たちが酒を持ち込んで、むちゃくちゃになんですよ。急性アルコール中毒で死亡者が出るんじゃないかって心配しまして、駆けずり回っているうちに、いわゆる、今言った、注釈付きの外人部隊に2階から投げ飛ばされましたよ、下に。そういうこともありました。

私の前の前の学生部長の自宅は爆破されましたからね。そんなのがあったんですよ。命懸けなんですよ。大学の授業なんていうのは、道路みたいなもので、誰が聞きに来てるのかなんて分かりはしないで

すよ。私の顔をちゃんと知っているんですよ、もう。わあっと学内外の学生たちが駆けつけてくるんですよ。走ってくる。「学生部長、中野、てめえは」なんてやられちゃって、それが印象に残っています。

当時は、社会問題に真剣に向き合おうとしない人々を指すノンポリという言葉があったんですよ。今はあまり使わなくなってきたんですけどね。そういうのはある意味でばかにされていたんです。軽蔑されていたんです。だけど、今は世の中というのは、抗い難い大きな力でぐっと変わっていきまから、みんなノンポリになってしまった。そのノンポリと言って軽蔑した言葉さえもなくなってしまった。みんなある意味で、一気に転換し過ぎてしまったんですね。

これが当時の大学の事情です。それから、学部の事情で言えば、当時はカリキュラム合宿等は泊まり込みでやっていました。比較的近年までやっていたんですよ。それから、若手教員は全教員の前で合宿の最初に何か発表するとか、私も、タイトルは忘れちゃったけれども、若手だった当時、経済学部の先生方の前で話をさせてもらいました。そんなこともありました。

実は私、ちょっと個人的なことで申し上げますけれども、神奈川大学に奉職して、一番強いインパクトを受けたこと、これは何かと言ったら、経済学会発行の『商経論叢』です。これはすごいインパクトを受けました。読むと、いずれもまさに緊張感に満ちた研究業績が発表されていました。私はこれは大変な職場だと思いました。レベルの高い職場だと思いました。だから、必死になりました。負けられないと思いました。とても幸いなことに、当時そんなに役職はさせられませんでした。今のように何だかんだ、委員会はなかった。だから、実は私は専任講師から助教授のころは、授業が終わると、さっさと国立国会図書館に行っていました。ほとんどの時間を国会図書館で生活していました。お昼ご飯も全部そうです。授業のあるときだけはぱっと大学に来るんです。そうすると、経済学部の、例えば、お亡くなりになったけれど、吉沢法生先生と出会ったり、いろいろありましたよ。そういう延々とした時間が

あったんです。

このとき、私の個人的な研究のことだけれども、貿易取引を法律で研究するところが、少し前から、マーケティング概念を導入して、貿易をビジネスとしてとらえようという研究を始めたんです。だから、一から勉強を始めて、いわゆるマーケティングの古典と言われる本を読まなければならなかった。国会図書館で、延々と商業学、マーケティングで有名な古典と呼ばれる洋書をどんどん読み尽くしてきました。今でも覚えています。何度も繰り返し読みました。A. W. ショーの「*Some Problems in Market Distribution*」とかダンカンやF. C. クラークなどの洋書を、延々と読むことができました。これはものすごくありがたかったです。あれを通過しなければ、その後の研究は回らなかったかもしれない。大体の古典を読破できたということで、学問的に精神的に安定することができた。これは非常に大きかったです。私の神奈川大学経済学部で奉職しての一番強い印象は、学生部長としても苦労したと言えば苦労したのですけれども、『商経論叢』ですね。一番強いインパクトがありました。

**【司会】** ありがとうございます。まさに神大経済学部の回顧と展望にふさわしい、素晴らしいお話をお伺いしております。

**【秋山】** ちょっと質問してよろしいですか。その当時、本学の授業料は国立大学より低くて、全国から優秀な学生が集ってきたということですが、先生方の給料も低かったのですか。先生方の給料も低くなければ学校経営が難しいと思うのですが。それとも、それは別に問題なかったのか、その辺の事情をお話いただけたらと思います。

**【池上】** そうですね。秋山さんの言うことはよく分かります。先ほども話が出ていました。国立大学より低かった時期があるんですよ、間違いなく。ちょっと脱線するかもしれませんが、授業料が安いというのは優秀な学生が来ますよ、間違いなく。私は、役目柄、父母懇談会とか地方に行くことが多いわけですが、そこで、宮陵会といったOB・OG会の方が必ず出てきて、少しお話ししていただくのですが、そういう方というのは、ほとんどその紛争の時代の人です。40年代の後半から50年代、特に40代後

半ぐらいの人ですね。異口同音に言うには、要するに授業料が安いから入ったと。非常に優秀な人です。とても優秀な人がいます。その地域においては、古くさい言い方になりますけれども、その土地の名士ですね。大体その地元の人が知っているような方が本当に多いですね。

今なかなか難しいですが、授業料というのは、今、こういう経済状況でしょう。ですから、何とかすると、もっと優秀な、もっとと言ったら語弊があるかな、優秀な人材が入ってくるんじゃないかということは考えているんです。その当時、秋山さんの今のお尋ねの給料とえば、私はそんなに低いというふうには思っていませんでした。私の側聞の限りでありますけれども、そんなに安いということではなかったということだったと思います。ただ、今と時代状況も随分違いますから、なかなか今の状況から、昔の安かった授業料と同じことができるかどうかというのは、また別問題ですけどもね。

1つは、まだまだ受験技術的な、入試に長けていない、素朴な非常に潜在能力のある学生がいっぱいいます。それは家庭的な状況、ましてやこの状況の中ですから、特にそれが増えていると思うんですけども、なかなか大学に行けない。授業料が安いとそういう学生がより多く入ってくる。しかも、うちは給費生試験とか、地区試験をやっていますから、受験の機会が、地方で受けることができるわけで、そういう、昔の学生がよかったということと言うわけではありませんけれども、全国から学生が入ってくると、これは学生にとっていいんです。いろいろな学生がいると。

われわれは考えてみると、学生時代いい友人がいたということです。随分昔の話になりますけれども。それはいつの時代も変わらないので、今の学生も、そうだ、あのとき、先生の講義はあまり面白くなかったけど、いい友人がいた、一生の友達ができたなんて思っている人がいっぱいいるはずなんです。そういう学生がどんどん増えるような形に、これからの大学もなればいいというふうに、今の話を聞いて思いました。

**【中野】** 当時はまだ所得が低かったから、当時の学生たちは国立大学の感覚で来ていたんですよ。私



の給料が17万円台でしたね。でも、そんなものだろうと思っていました。当時はまだ専任講師で、さっきも言ったように、これだけレベルの高い論文ばかりだと、これは負けれられないと思い、ほとんど全部頭は研究のほうに行っていたものですから、給料は、女房は苦勞したのか知らないけれども、安いという記憶は全然なかったですね。もう研究で夢中ですね。古典を読まなければならないので、それでいっぱいだった。

**【大林】** 秋山さんの質問に、少し説明的に考えると、拡大路線だから、毎年というか、何年置きに学生数が増えるでしょう？ その増えるというところが、相当大学経費を見通しとして、いい見通しだから、やっていたということと、あと大学会計の当時の在り方の中に、設備とか、大学会計特有の論理があるんですよ。あと今の中野さんの話の延長線になるんだけど、当時は大学教員になるということは、もうお金はいいと。自分の生活の中で、お金で獲得できる豊かさはもういいという覚悟が出発点なんです。それは今から考えると、検討するべきことはあるけれども、それがあったというので、僕は当時の感覚だと、大学間の教員同士としてはそんなに給料が低いという思いはなかった。もちろん差はあったんだけど。当時のサラリーマンというか、ビジネスに入った友人たちと比べると、大体僕の1.5倍から2倍でしたよ。感覚的に。だけど、それがうらやましいとか何とか全然思わなかった。

それでやってきたということと、それがわが神奈川大学が授業料をはじめ学費を低くするという路線が、先ほど述べた神奈川大学の再生の中である種平凡な大学になってきた。特色が失われて、その後、寮が学生運動の拠点になったということで廃止になったりしますから、その点でいろんな意味で平凡になった。僕なんか個人的感覚からすると、初めから最低限の生活ができればいいやなんて思っていたから、結構こんなに豊かになっちゃったという、変な感覚がありますよ。

**【中野】** 同じだね。

**【大林】** あるでしょう？僕は基本的には給与は低くていいから、教育環境、研究環境を良くしてくれというのは、僕の個人的、一教員としての要求です

よ。そういう覚悟というのは、当時は、大体の一般教員の共通感覚だったと思います。ですから、その点で、時代はそれを許さないということはあるかもしれないけれども、僕は非常に懐かしく、好ましく、今でも思います。

**【中野】** それは教員だけではなくて、意識が違うんですよ。例えば学生時代に僕の親友が、高橋和巳とか、はやりの小林秀雄のモーツァルトがどうかあるじゃないですか。話をするじゃないですか。新しく出た評論について、友達が話題にして、僕がまだ読んでいないと取りあえずごまかして、適当に合わせて、別れたらすぐ走って本屋に買いに行った。それが見栄なんですよ。物欲ではなく見栄を張ったのです。

あるいは、いい論文を、人にインパクトを与えるような論文を書く、それが豊かなことであってね。ところが、その後、物が豊かになってくると、みんな、教員も含めて、いろいろな人が物欲におぼれちゃうじゃないですか。そこから、給料とかを意識するようになるかもしれないけれども、われわれは、今、大林先生もおっしゃったとおりのことですね。全くそのとおりです。

**【司会】** まさに学者としての研究姿勢ということについては、われわれももう一度襟を正さなければならぬところだと思います。次に、本学における先生方のご専攻の歴史や教育研究について、本学の研究環境なども含めてあらためてお話を聞きたいと思います。

## 本学における自らの専攻の歴史と教育・研究

**【池上】** 今度は逆回りにして。(笑)

**【大林】** さっき中野さんがついでに自分の勉強のことを言ったから、特に僕は兼子さんがコピーしてくれたところに貿易学科の問題があって、これがみんな知らなくなっちゃったんだよ。

**【中野】** 『神奈川大学五十年小史』によると、横浜専門学校ができた翌年には貿易学科ができています。この学科は当時の日本が置かれた状況にとっても合った、なじんだ学科だと思います。メーカーが製造するための原材料を輸入し、できた製品を海外に輸出する業務を担う人材が必要とされ、そういう人

材を神奈川大学貿易学科や旧高等商業学校などが育成したわけです。海運貨物業界にはとても多くの神大OBが、今もいます。また、私が赴任した当時は、「貿易研究部」、「商業英語研究会」、「貿易商務研究会」などの学生サークルがあり、部員が100名を超えるサークルもありました。長引く経済不況などのせいでしょうか、その後、学生の学術研究サークルは激減しました。もっとも、「貿易」というものも大きく変わりました。

企業が海外に拠点を持つ多国籍化が顕著になり、企業グループ内取引、言い換えれば親子取引が多くなり、従来の「貿易商務論」の枠組みをはみ出すような国際商取引現象が顕著になってきました。早稲田大学商学部では、「貿易商務論」を包摂する研究体系として「国際商務論」を設置しましたが、我が神奈川大学でも、最近になって「国際商務論」を開講しました。

このように、貿易取引に限らず、経済現象は時々刻々に変ります。私は、貿易実務を学生諸君に覚えさせるということは、あまり重視してきませんでした。すぐに役に立つことは、すぐに役に立たなくなるのです。知識の暗記ではなく、貿易取引という現象を利用して、そこに内在する問題をどう理解するか、ということに力点を置いてきました。混沌とした現象がある視点からみると、一定の一般性を持って説明しうる、そのような視点を理論と言うとすれば、そのところが大事なのです。

留学生に、日本の中学校で習う「関数や因数分解を習ったか」と尋ねると、日本の中学校と同様に、「習った」と言います。お父さんやお母さんが社会で関数や因数分解を使うことは、普通はありません。使わないこと、役に立たないことを世界中の学校で教えているのは何のためでしょうか。これは筋トレならぬ脳トレ、すなわち脳のトレーニングなのです。「貿易商務論」も「国際商務論」も、関数や因数分解の延長線上にある脳トレなのです。私は、いつもこういう意識で研究、教育をしてきました。

【司会】 まさに研究と教育についてお話を伺いました。大林先生、いかがでしょうか。

【大林】 自分の分野のことを言う前に、中野さんの話を補足すると、神奈川大学が、この横浜の地に専

門学校として設立するというのは、新興の地域ということと、ここには働く人が、京浜工業地帯形成時代ですから、まさにいっぱいいた。ところが、大学、教育機関は少なかった。特に高等教育機関が少なかったというところに、ある種目をつけた。それから同時に、日本の戦前から戦後にかかわる輸出入、貿易立国の流れがある。先ほど池上先生が言われた、優秀な学生が多かったというのは、少なくとも文系については、貿易学科の優秀な学生が多かったという意味が主たる意味ですよ。だから、それは時代の課題を担っていく大学という位置付けが、僕は神奈川大学の原点にあったと思います。

それから、中野先生の言ったことと同じなんだけれども、大学の大事なことは、基礎学力ということももちろんあるんだけれども、大学の提起するのは、ちょっと最近の言い方で嫌なんだけれども、問題を発見してそれに対して処理できるという、問題が先なので、教科書が先ではないんですよ。教科書で一応セオリーを習ったからこそ問題を感じるという側面はもちろんあるから、それは相互作用なんですけれども。だけど、問題を自由に話し合えるというところは、大学の大学たるゆえんだと僕は思います。だから、そこは大学の自由とか自治とかいう問題がなければいけない、原点だと思いますけどね。私の個別の中小企業論というのは、ある種、名前どおり、マイナー的な位置で、マイナーにこそ、ある種のアイデンティティーを持つという、ちょっと上から目線とか、多数派という意味がないところに。

【池上】 大林哲学。(笑)

【大林】 それはともかく、そうだったんです。だから、僕なんかが赴任したときに、前任者は山崎広明という、その後東大教授になった、非常に有名な経済史の先生で、今はお亡くなりになりましたけれどもね。

【池上】 繊維をやられた先生ですよ。

【大林】 有名な経済史、東大社研に移った。その人の残された文献なんか、僕はとてもありがたく思っています、図書館に。それはともかく、僕が入ったときは、中小企業論というのは、マイナーな感じで、学生にも人気がなかった。いまだにそういう傾向はもちろんあるけれども、大学を卒業したら大企

業に入るんだ、大企業に入るために大学に来たんだというのが常識だったわけですね。それは決して非難すべきことではないので、当時はまさにそういう時代だったわけだから。

ところが、80年代から90年代にかけて、学生の中小企業論という科目を見る目が違ってきて、その後履修者が増えていったのと、それなりの個別の関心を持つ学生が増えてきたということが言えます。これはアメリカ・ヨーロッパのそういう中小企業なるものに対する関心というのから見ると、やや遅れているんですね。1970年代に、先進国がスタグフレーションということになった流れの中に、一方ではアメリカ的な金融立国、新自由主義的なとか、そういう政策に突っ込んでいくという流れと、もう1つは、中小企業、あるいはベンチャーとか、そういう方向があったんだけど、これはまた主流にはなかったんだけど、底流としてはそういうものがアメリカ・ヨーロッパでは始まるんです。それが90年代になって、非常に盛んになって、日本の中小企業研究というのは、日本固有の勉強だというふうに、われわれは始めたころ思っていたし、日本の貧困研究の1つみたいな位置付けも、極端に言うところであつたわけですよ。僕は、そこに自分のアイデンティティーを持ってきた面もあるんです。

だから、その意味で、90年代以降は、先進国の中で、中小企業なるものが、それぞれの政策に、必ずしも皆さんには見えないかもしれないけれども、底流として強まっているということなんです。つい最近も、極東書店から、アメリカのファミリービジネスという、家族経営ですよ。日本で言えば自営業ですよ。そのこんな4冊本の研究収集が Outcome して、図書館に入れてもらいましたけどね。アメリカはもう今、ファミリービジネスの国になりつつあるんです。ビッグビジネスの国から、スモールビジネス、それからファミリービジネスですよ。そういう大きな流れもあって、これは中野さんの分野の大きな変化とか、それはわれわれの分野での大きな変化ですよ。そういう点で、今、非常に、大学を去るこの時期になっても、ある意味では興奮しているとか、経済体制の根幹としての中小企業という、こういう問題意識を持てるようになってきたという

ことを……。

【中野】 僕らにもそのことは聞こえてきていますよ。今おっしゃったこと。

【大林】 だから、中野さんの言われたような事業の中に、それは大企業だけがやっているのではないんですね。日本の大きな特徴は、国内で中小企業がやっているように、海外でもやっている。国際人材の育成なんていうのは、われわれがかつてはほとんど関心を持たなかったけれども、今は大きな重大課題です。

それから、学生の意識でも、あるいは大学の就職氷河期から始まる流れの中でも、最近、神奈川大学もそうだけど、あるいは先生方の中のいろいろな会議の中でも出てくるし、就職課の方針でもそうだし、“優良中小企業”を探せというのが、今の大学の就職課のトレンドですよ。これは典型的には福井大学、就職ナンバーワンと言われて、国立の福井大学が北陸地域のいろいろ中小企業にどんどん卒業生を送り込んでいるというところが、あそこの就職率ナンバーワンの1つの根拠でもあるわけですよ。かつては、福井で育てて東京に送るということで、東京の大企業に送る。そういう意味の大きな流れがあって、これは大げさに言えば、現代資本主義の問題とか、そういう問題を含めて、非常に興味深い動向だというふうなのは、自分の分野の問題意識であるし、その意味で、そういう流れを学生に今後とも伝えていってほしいなというふうな気がします。差し当たりそういうことです。

【司会】 それでは、池上先生、いかがでしょうか。

【池上】 ここは個人史を語る場ではございませんが、この機会ですから、ちょっと自分のことを言わせてもらいますと、もともと、私は大学院は経済政策、経済史で、どちらかという経済史をやっていました。もちろん経済政策も非常に関心があったわけでありまして、その中で、いわゆるマスター、今流で言うと、博士前期課程、このときは金融をやったんです。ところが、金融をやったって、歴史ですから、ここでは複雑多岐な現象の中で、金融を見るということをやりますと、結構、今でもそうですけれども、政治的な要因を無視できない。政治ということに、魅力というか、政治ということが

分からないと、いろんな経済は分からないなという感じはずっと持っておりまして、そういうこともありまして、ドクターに入ってから、財政のことをやり始めたんです。

財政というのは、かなりボーダーライン・キャラクターと言いますか、境界線上の学問という性格がありますから、政治とか行政とか、法律とか経営とか、そういうことに絡みます。私はそういう絡み合った世界と言いますか、絡みのところがなかなか一筋縄ではいかないというところがあり、絡み合いの世界というのは、そんなに簡単にほぐれるわけではございません。しかし、それが現実ですから、その現実から見ていこうということです。

私は前に租税史で、日清戦後経営のことをやって、酒税の役割に注目しておりました。酒税というのは、当時の基幹税ですから、税収の相当の割合を占めていたわけですが、酒造議員というのがあるんです。圧力団体ですね、一種のプレッシャーグループです。自分たちが税金を納めているので、これが結構、一大勢力になるわけです。これはいろいろなところに影響を与えていました。そういう構図なんかを見ていくと、動きが面白いんですね。現場の生の動きが面白くて、実際、私、カメラを持って灘の酒屋さん訪ねて、資料を収集したりしまして、後で阪神淡路大震災でかなり打撃を受けたところがあります。そこへ行って、結構調べたりなんかしまして、私は歴史が出身ということもございまして、今でもわくわくするところがあるんです。新しい資料とか、今まで見なかった資料とかが見つかりますと。

だから、どちらかと言うと、私は理論畑じゃなくて、実証畑の人間でありまして、そういうところから出発したということでもあります。ですから、私は、最初のころは、ここにありますが、岡野鑑記さんという、私、名前だけしか存じておりませんけれども、賠償問題をやっておられた方です。私が学部に入ったときは小林晃先生。非常に理論的な財政学を専攻されている先生です。私はどちらかと言うと初期の授業のときに、今でも講義ノートを持っていますけれども、財政の歴史をやっていたんです。財政史をやっているうちに、財政が分からないと

社会は分からないだろうというようなことでやっていたんです。後半、軸足を現在に移しまして、現代の財政問題をやっています。

にもかかわらず、私は現在、財政問題は授業としてはやりますけれども、自分の専門としては、歴史的な視点というのがあります。それで中身としては、租税史みたいなことで続けているわけです。

この5年と言いますか、10年と言いますか、最近、またよく言葉が出てくるようになりました、いわゆる公共性という問題があります。財政というのは、公共的なもの、財政は政府の経済活動ですから、公共を担うところとしての財政の問題です。現在、財政は非常に厳しい1人当たり550万円ぐらい借金をしているというようなことを言われるわけですが、その中でわれわれの生き方の問題、つまり公共とのかかわり方の問題を考えていかなければならないと思います。

これもよく使われる言葉ですが、お任せ民主主義とか、配分民主主義という言葉があります。要するにあまり自分自身は政治に関与しないけれども、配分だけを求めるとか、任せてしまって、後はどうなるかは知らないというようなこと、これがずっと続いてきているんじゃないかというふうに私は思うんです。このままで行けば、もう皆さんご存じのとおり、膨大な借金を抱えているわけですから財政破綻の危険性は常にあるわけです。

公共性なんていうことを言う者にはろくな者がいないという議論が昔からあります。ただ、政府の財政負担と減らすためにあるのではなく、要するに、私の言っている公共性というのは、英語で言うとパブリック・コモンみたいな言葉になるわけで、パブリックとプライベートの間にあるものです。そのところに着目せざるを得ない。皆さんご存じのとおり、NPOとか、NGOいろいろな組織体がある今、随分出てきましたけれども、あれは時代の流れだというふうに私は思っているんです。その存在が今後非常に高まると思っているわけです。

NPOと言ったって、新しいビジネスそのものみたいに考えてやっているようなところもありますが、一方、しっかりやっているところもあります。私は、国境なき医師団とかの活動は素晴らしいな、

というふうに思ったりしまして、このような非ガバメンタルな組織体というのは、これからますます重要になってくると思っています。そこら辺に、今、関心を非常に強く持っています。本来、パブリックがやらなければいけないことを、パブリック・コモンというところにもっていくということでは決していないんですけれども、「私」でも「公」でもないような組織とか、あるいは考え方、これが今後ますます重要になってくるんじゃないかなろうかというふうに思っています。

これは冒頭の話とも多少関係してくるんですけれども、冒頭というのは、田中真紀子問題、要するに結局91年ですか、92年ですか、大学の新増設などは設置基準大綱化からの動きでできたわけです。英語で言うと、大綱化なんていう英語はありませんから、Deregulation of University Act です。規制緩和の流れです。1つの大きな規制緩和の流れから出てきた言えることで、規制というのは、釈迦に説法になりますけれども、いろいろな規制があります。経済的規制とか、社会的規制とか、安全的な規制とか。安全的な規制なんていうのは撤廃してはいけません。安心・安全というのは、個別法律をつくっても、きちんと担保していかなくてはいけないというふうに思っています。

大きな流れと言うと、そういう規制緩和、これは、1つ時代の流れであることは間違いないと思うんです。その流れで事前チェックから事後チェックに変わっていったという、そういう大きな流れの中でも、「官」から「民」への役割の移行が増えつつありますが、結局は、政府がとらなければいけない責任ってたくさんあります。最低保障とか、社会保障とか、生活保護です。これらは絶対やらなくてはいけないところで、政府のやることは厳然としてあります。しかし、自分たち自身で、自分たちの生活がある意味では自分で律していかなくてはいけないところがあるのではないかな。しかし、電力使用の問題とか、原発問題に関係する自分たちの方でも、無駄なことを使わないなんていう、そういうところで自分たちのところで律するとか、自立とか、じりつの2つの意味がありますけれども、そういう時代に入ってきているんじゃないかなろうかということを思っ

ています。

【司会】 ありがとうございます。

【大林】 先にお名前を挙げた長倉先生という先生は日本経済史を専攻していらして、醸造業の研究家でもあります。僕の分野でも、伝統産業の問題がありますから、それで醸造業については非常に関心があって、最近の世界に誇る日本の産業は何かという問題で、日本の醸造業、あるいは発酵食品その他のものが注目されている。ソニーだって、原点は盛田家は醸造業ですから。政治家だってほとんど同じですよ。だから、そういう深いところがある。例えば、なぜ純米酒がなくなったかとか、今なぜ純米酒なのかと。最近、『闘う純米酒』という本があるぐらい、戦わないと純米酒はできなかったという歴史がある、日本では。

【池上】 よく言うけど、酒税法はあるけれども、酒造法はありません。酒造りの法律はないんです。税金だけなんだ。昔から酒は財政物資だから、税金の対象です。酒税法は民族の酒の日本酒をまずくした大きな原因です。

### 大学教員として思うこと

【大林】 日清戦争は酒税で戦争したみたいなのですから。もう自由な話題でいいんでしょう。遺言なんだけれども。(笑) 大学教員として、役職とか各種委員をどうとらえるかということで、これは皆さんも承知しているから、あえて私が言うことではないかもしれないけれども、今、3人の話でお分かりのように、研究動機が教員になろうということでなかった。必ずしもわれわれの時代は、簡単に教員になれるとは思っていなかったから、いろいろな不遇があっても構わないけどという気持ちがあった。時代の波に、勢いに幸いされて、たまたま大学教員になったという経過だと思うんですよ。だから、大学教員を目指して研究したわけじゃなくて、研究して、大学教員になったというふうなことに、少しきれいに言い過ぎちゃうかもしれないけれども、そういう面があるんです。

だから、基本的には役職とか委員ってしたくないわけだよ。中野さんみたいに、授業が終わったらすぐ国会図書館に飛び込むということですね。だか

ら、役職・委員を逃げ回るかという問題が発生する。それは少なくとも、私は逃げ回ってはいけないと思います。しかし、逆になりたがってもいけないと思うんですよ。なりたがるのはおかしいんだ。一刻も研究したいということがあるからね。だけど、みんなそれなりの公平な選挙とか推薦で選ばれたら、それは一生懸命やらなければいけない、そう皆さんに見えているかどうか知らないけど、少なくとも僕はそういうつもりでいました。

同時に、役職なり委員の人に協力するというか、その人の役割を尊重するというか、そういうことを皆さん同時に持っていただきたいというふうに思います。その感覚は、僕は別に自分で見いだしたわけではなくて、割合ずっとそういう通念が共有されていたんです。だから、役職が終わればご苦労さま。みんなでちょっと慰労しましょうということもあったし、委員をやって、委員がちょっとこういう文章を書いてくれと頼まれたら、嫌でも、「いいよ、いいよ」という、こういう雰囲気があるときまであった。ところが、今はそれが難しい。役職になったら、サンドバッグみたいになっちゃうわけですよ。みんなの攻撃対象になるというような側面があるので、僕はそういう点では、大学の中で教員が役職や委員に就くという意味をもっと考えてほしいなとつくづく思います。

それから、その裏腹の問題で、教育研究の問題があって、研究というのは多様でなければいけない。研究分野というのは多様であってこそ、全体ができるわけですからね。

**【司会】** ユニバーサルというぐらいですからね。

**【大林】** 研究対象のランク付けみたいなのをしている人がある。こういう研究が一番素晴らしくて、こういう研究はくだらないという、そういう感覚は、ほとんどナンセンスに近い。それが故に、研究分野のヒエラルキーがあって、そのトップのところに自分がないと研究をあきらめちゃう。研究をあきらめた人は、僕は大学教育はできないと思う、基本的には。それは、僕なりに考える大学の教育というのは、問題の発見、気づき、何が問題であるかということ、人々は、一般には気がつかないけれども、自分は気がつくというか、気がつくって、それが当

たっているかどうかは別ですよ。自分はそれを問題にしていく、そしてそれに対して取り組むということは、研究して初めて分かることなんですよ。

だから、それがないと、もう既存の知識を伝えるというだけです。今のように変化が激しく、かつグローバルで、世界の人が研究教育に参加する状況、世界の今まで全く知られない状況、それからそれを担っている人々の知見が、学問の分野の競争として出てきているわけだから、日々そういうものと接しないといけない。学問の動機が生まれえないと思いますよ。だから、開かれたというか、大学の中の研究室だけにいる時代ではないと思います。そういうようなことも含めて、教育と研究ということ、真摯に考えて、何とか大学としてとどまるようなこともなければいけない。

あまり言えないんだけど、だから、僕は偏差値はあまり気にしないタイプですね、ほとんど。学力差というのはもちろん……あるんだけど、学力差というのは、能力差とか、そういうものを過大評価する必要はないと思います。ただ、家庭環境とか、育てられた環境の中で、勉強する習慣が弱いとか、あるいは一歩下がって、知的に物を考えている習慣が少ないとか、そういうことに対する尊敬とか、あるいはそういうものに対する要求とかが少ない中で育った人がいるから、それでいろいろな差が出てくると思います。だから、大学の教員ならば、専門分野と、専門分野から広がる世界を、学生にぜひ伝えてほしいというふうに、ちょっとこれは老人の願いですけども、つくづくこの2点だけは伝えておきたいというふうに思いますけれども。

**【中野】** 大林先生が指摘した研究対象のランク付けのことだけれど、何が科学であり、何が科学でないか、というのは研究対象に依るのではなく、研究方法に依るのです。研究方法には、歴史主義的な方法、仮説演繹的な方法、数理論理に基づく方法、あるいは帰納的な方法などがあります。もっとも、帰納という方法は厳密に言えばあり得なくて、演繹に含まれますが…。

学生諸君には、科学としての研究方法を伝えていかなければなりません。具体的に言えば、ここに2012年度『かながわ論叢』審査委員会の『『かながわ論

叢』論文応募作成に当たっての留意点」があります。ここに書いてあることは非常に当たり前のことなのですが、とても重要なことです。出典を明記する、文章をそのまま引用することは最小限にとどめて、事実関係やデータについて自分の言葉で文章化するとか、あるいは独自に収集整理した資料、データ分析、アンケート調査などに基づいた実証的な論文を目指してほしい、論文では「はじめに」と「おわりに」が大事である、ということが書かれています。これはどの研究分野についても当てはまる。それから、注釈を付けず引用した場合は無断盗用と見なされると書かれていますが、とても重要なことです。

われわれはこういうことについて教えるのが仕事だ、と私は思っているんです。ところが残念なことは、懸賞論文の応募作を見ると、1年生でないのに、基本的なことが分からない論文が多いのです。それは上級生になってから少しずつ勉強していくという人もいるだろうけれども、こういう基本的なことをきちんと私たちが伝えていかなければならないことだと思っていますよ。

**【池上】** 先ほどちょっと話が出ていますけれども、昨今は特に大学の教員というのは非常に忙しくなってきた、これは仕方がないことはあるんですが、その中で忙しさが出てくるのは、本当は研究教育というのがメインであるべきですけれども、先ほども出ましたように、どうしてもある程度みんな分担してやらざるを得ないのは行政です。これがどうしてもあるので、経済学部は、今7学部ある中で学生の人数が多いとかいうこともあり、全学的に見ると、経済学部ということのを他の学部は意識しています。ほかの学部の先生方、皆さん。事務職員もそうです。ということで、比較的、経済学部の先生方がいろいろなポストと言いますか、責任者に就かざるを得ないというのはどうしても出てくるので、それはやむを得ないということになるかと思います。

ただ、問題は、結局、行政をやるために大学に入ってきた人なんていないわけですから、それはお互いに分担しながらやるということをやりませんといけないのですが、難しいのは、教員構成の年齢の問題とか、経験年数とか、そういう問題なんです。結

局、われわれこの3人が比較的長くいろいろなことをやってきたというのは、ちょうどわれわれの上にいる先生方がいなくなっちゃったんですよ。

**【大林】** 特に学部でね。

**【池上】** 要するに学部の話だけだね。例えば、若くして亡くなられましたが、吉田威先生あたりがいたらだいぶ違うんです。こっちに行政の仕事がまわってこない。梶村秀樹先生はあまり行政に向いていないような感じでしたけれども。あと新田先生とか、稲田先生なんかも。

**【大林】** 稲田先生もそうだね。

**【池上】** あのぐらいの層の人がぽかっと空いちゃった。だから、結局われわれのところに回ってきた。それでやらざるを得なかったということもあります。これは行政だけの話ではありませんけれども、学部運営の連続性から考えると、教育の連続性とか、そんなことを考えると、今は意識的にやっていると思いますけれども、年齢構成とか、そういうことも配慮して人事をやりたくないと思います。

さっきも大林さんから話があったように、喜んで行政やる者なんて誰もいないです。そのために入ってきたんじゃないですから。欧米というか、アメリカ的な大学によくあるように、行政をやる人は完全に分けてしまつてという、やる人はやる人、そういうことにすればいいんじゃないかというのがありますけれども、日本では合わないんです。行政をやっている、研究の内容が分からなかったら、経営サイドだけの話になります。お金だけの話になりますから。財政の問題は大切だということは分かりますけれども、教育という場でもありますから、そういうところで考えてもらわなくては困る。そうすると、分担しあって、教員が、行政的な側面をやらざるを得ないということです。

先ほど事務職員の話が出ました。事務職員もかなりベテランの人や、本を何冊も書いているような事務職員がいるのは皆さんご存じのとおりで、非常に優秀な方がいます。優秀な方がいますけれども、これはやっぱり事務職員です。研究教育体制を事務のほうからちゃんと支えてくれるという、そういう役割がちゃんとありますから、行政を下支えする仕事はするにしても、行政そのものを全て事務職員はや

るわけではありません。そのことは教員がやらなくてはいけないというところはあるということです。そのためには、お互いに分担してと言いますか、そういうことでやっていかざるを得ない。先ほどちょっと話が出ましたように、文句ばかりつけるんじゃないで、自分では分担せずに文句つけるのはやさしいんですから、文句をつけて、後は知らんぷりするのは一番楽ですよ。だけど、そんなことをやったら、大学は駄目になりますから、そういうことです。

あと1つは、2人の先生が言われたけれども、先ほども出ましたように、多様性とか、専門教育の違いをお互いに認め合ってやらないと、そうしないと、学問それ自身がおかしくなります。どっちが上だとか下ということではありません。

さらに言いますと、最近、経済学部は外への発信力が少し弱まっているという感じがします。内にこもってまとまるということは、あまりよろしくないんじゃないかと私には見えるんですけどね。

それから、専門の研究に近い人ばかり集めるという人事は、今の大学にはあまりふさわしくありません。今は他大学の研究者との交流が十分可能なときですから、他大学の先生と共同研究をやればいいんです。学内で1つのマイクロコスモスと言いますか、小さくまとまって研究するようなことは考えないほうがいい。

教育面においてあまり専門的なことを細かくやるというのは、ふさわしくありません。よく言いますように、われわれの経済学部は経済学者を養成するために教育をやっているわけではありません。大所高所に立って、経済学とか貿易論とか経営学とか、そういうことが論じることができる先生にやっていただきたいと思います。自分ができなかったから言うわけじゃありませんけれども。ご自分の専門の分野ではどんどんいい仕事を出してくださっていいんです。だけど、それは大学内、学部内で内向きでまとまってやるんじゃないで、外側に出て行って勝負してほしい。学会活動、いろいろあるわけです。もちろん学内においても、1つのまとまりをつくって、神奈川大学経済学部の特色を出すように、やることはもちろん悪いことではありませんけれども、

そのみに終わってはいけないのではないかと私は感じています。

**【大林】** 今、いろいろなさまざまな社会の問題、世界の問題、問題だらけというか、問題の深刻度というのは非常にあるわけだけど、こういうとき、本当に一人ひとりというか、自分のわが身を見ても非力だけれども、こういうときこそ、ある種のファイトがわくんだよ。なぜ、どうして、いかにというね。特に自然科学者だって、人文科学者だって、まさにそうだと僕は思うけれども、社会科学者の場合には特にそうだと思うんですね。その意味で、研究意欲がわく時代だとも思っている。その研究意欲が醸成されるし、わく時代だからこそ、行政なり、今言われたように、外へとか、あるいは外国の研究者との交流というのは意味を持つし、そういう忙しさというのは、通常の忙しいという意味とは違う。ある種の充実感の時代、充実感を得られる時代になっているんじゃないかなというふうに、逆に思いますね。だから、そういう意味では、社会科学者にとって、困難は満ちているけれども、内的な意味での内発力というか、そういうものはむしろつくり出されているような気がいたしますよ。そういうことに支えられて、われわれは前進したらいいというように思いますけれども。

**【池上】** 退職したら研究三昧。(笑)

**【大林】** 三昧ではない。(笑) 都市浮浪民としての研究者。(笑)

**【池上】** また始まった。(笑)

**【大林】** 徘徊老人に。(笑) 徘徊の不良老人になりますから。世の中の輦轡を買わないように注意しなければいけない。

**【中野】** 広く発信してというのはいろいろな意味が含まれていると思うけど、もう1つは、今のような時代に、グローバル人材の育成ということも、大学に期待することとしてあるんですよ。ここに、『通商白書(2012)』がありますが、この中に「グローバル人材の育成」という項目があり、「日本人の英語力」ランキングが載っています。1位のオランダ以下、82位に韓国、107位に中国、そして135位に日本がランクされています。

製造業で海外売上高比率が50%を超えている企業



が山ほどあり、外食産業や各種小売業が海外出店を加速化している時代に、グローバル人材の育成は大学教育にとっての重要課題です。

円高の今は、日本企業にとって海外企業のM&Aの好機です。海外企業を買収するということは、スピーディーに海外企業の特許を含む技術、販売網、有能な人材などを入手できる、ということです。買収した海外企業を管理・運営して、配当金を日本に送金する。その資金で世界の先端をいく製品を開発して、日本再生をめざす、というシナリオを描くことができます。2009年の税制改革で「配当免除制度」が導入されたので、海外からの送金の95%は非課税になりました。問題は、買収した海外企業を管理・運営するグローバル人材の不足です。わが経済学部におきましても、そういう視点をもってほしい。

先ほど大林先生が遺言という言葉を使ったけれども、私の遺言はこういうことなんです。定年まで奉職した神奈川大学ですよ。やっぱり愛着があるんですよ。すごく強い愛着がある。ぜひ発展してほしいと思う。そのとき、しばしば一般的な傾向として言えば、教員は自分の研究が大事だと思うからこそ一生懸命やっているわけです。だけど、しばしば大局を見誤って、自分にとっての居心地のよいお城をつくらうとするんですよ。これは危険だ。神奈川大学の歴史と地政学的な位置、世界の流れ、そういったことを考えて、神奈川大学経済学部はどういう方向に進むべきか。それは自分にとっての住み心地のいい城をつくることではないんですよ。大局に立って判断して、神奈川大学がますます発展してほしいと思います。そのときの1つとしては、今申したグローバル人材の育成ということも頭の片隅に入れてほしい。そんなことを願っています。

**【大林】** グローバル人材というときに、いわゆるコミュニケーション・スキルの向上というのは、今言われたようなランク付けすると日本は非常に低いから、そこの努力は必要なんだけど、もう1つは外国人と会ったときに何を話すかというとき、日本のことを話す。向こうの人は日本のことを知っていることを期待して話すわけだから。グローバル人材というとき、興味がない人、自信がない人に時々いるん

だけど、日本のことをよく知っていることがグローバル人材とは違っているように思うようだけど、そうじゃない、逆ですよ。コミュニケーション・スキルとか、あるいは世界に対する視野というのは、それはもちろん大前提だけど、その後に何かということになると、日本の中の自分ということですよ。

**【中野】** 学生が「語学研修に行きます」と言うじゃないですか。そうすると、「アメリカのホームレスはみんな英語上手だよ」と言うのが私の口癖なんです。(笑) 非常に困るのは、中国の大学の日本語学科で日本語を勉強した学生が、「私、日本語ができます」と言います。日本人に生まれて、日本語ペラペラな日本人の失業者は山ほどいるわけですよ。そう言われても困るんですよ。そこのところは当然に、大林先生のご指摘どおり、大前提にあるわけです。その上での話になるわけです。

**【大林】** 今、日本の企業は中国を含めて留学生を採用せよというのは、これまたスローガンですよ。日本のグローバル企業は特にね。そのとき、それを留学生一人ひとりとは母国について、よく認識があるということがなければ、それこそ今言ったように、日本語ができる外国人は別に要らないわけだから。そういう意味のことが逆の意味ですね。

**【中野】** これも大講堂でも僕は言っているんですけども、語学研修、語学留学、そんなものは社会人にはないよと。語学研修は大事なのですが、それは大学生にとってなのです。社会人になったら、語学の研修に行くという概念は通常は、ないのです。それは、医学の勉強をするプロセスの中で英語ができるようになるのであって、スポーツマネジメントをアメリカで勉強する過程で、英語が上手になるのであって、フランス料理の修業をする過程でフランス語ができるようになるのであって、語学研修というのは、大学生に対して特殊言えることなのです。ゆめゆめ社会人になって語学研修なんていうことを考えないこと、語学研修は学生時代にやっておくこと。語学はそれぞれの専門のプロセスの中で学ぶことです。そういうことをきちんと踏まえた上でのグローバル人材の育成ということが大事だと思います。

**【池上】** 2人とも、遺言なんて言ったけれども、私

は遺言なんか言わないよ。(笑) 2人とも私が看取ってやるから。(笑)

【大林】 まだ生きるつもりでいる (笑)。

【池上】 皆さん共通にそういう思いがあると思いますけれども、今、学生は覇気がない、よく言えば優しいのですけどね。優しいのですけれども、悪く言えば覇気がないということです。この世の中難しいことばかりで、先行きが分からないし、親を見れば自分の将来知れたものなどということではちょっと醒めて見ているところがあります。それが現実だと思います。学問というのは、現実から出発しますから、これからも、そういうことを前提にこれからの教育を考えていただきたいと思います。

先ほど能力と学力の話が出ましたが、私なんかも長い間やっていますが、ゼミなんかでやるのは、キチンと理解したとか、こちらの質問にどう答えるとか、どうしてもそういうのが先行しますけれども、卒業式間際になって、「実は先生」なんて、小声で話しかけてきて、この学生はこんなことを考えていたのかという、そういう人材がいるんです。本当にびっくりするぐらい。若い人というのは非常に感受性が豊かです。大学に入ったからには勉強してもらわないと困りますが、もちろんそれを前提にしながら、これからは彼らが世の中を引っ張っていくわけですから、このような観点から学生を育てていくということが必要だと思います。

よくわれわれは言いますが、昔はよかったとか、そういうことをよく言いますが、今の学生は、昔にはなかったような良さ、さきほどの公共性なんていうことで言わせてもらえば、私益より公益を優先するようなことを考えている学生もいると思うんです。今の若い人たちは。ボランティアに本当に積極的な学生もいますし、そういう良さがあるし、優しさもあるので、そういうところを育てるような形で、今後、これは経済学部だけの話ではありませんけれども、経済の学生を厳しく、しかも温かく鍛えていって欲しいというふうに思います。

絶対いいところがあるんです。どこかにいいところがあるんです。われわれは勉強の世界と言いますか、そこでちょっと接していますから、どうしてもそこで判断します。これは仕方がないことですけ

ど。だけでも、今、大学ユニバーサル化の時代ということと言いますと、皆さん知ってのとおり、いろいろな人間が入ってきていますから、それを前提に考えませんとうまくいきません。うまくいかないと最後は教え方の問題じゃなくて、学生の責任にしようという、非常に安易な結論の出し方になります。

学生さんは単なる消費者であり、神様などという言い方を私はもちろんしません。しかし、親の期待を担って、しかも授業料を払って入ってきているわけですから、教育によって付加価値をつけて出してやるということが必要になります。一生神奈川大学の卒業生という形で彼らは生きていくわけですから、神奈川大学にいい思いを持ち、学んで良かったなと思うような学生を送り出さなければなりません。昔の学生の話さをさきほど話しましたが、活躍している人に限りまして、限ってなんて言うと言葉が過ぎますけれども、ほとんど授業を受けなかったなんて言いながら、非常に母校愛というのが強い人がいるんです。さきほど大林さんが言ったけれど、確かに私の経験からすると、貿易学科が多い。非常に貿易学科が多いということは、誰に言ってもそういうふうに感じるので、そのような学生がかつていたということを忘れずに、自分の研究をするのは当然のことですけれども、今後、そういう学生を育てるという感じを強く持って、学生を厳しく、また温かく育てて欲しいものです。随分マイルドになっちゃったなあ。ワイルドじゃなくて、マイルド。(笑)

【中野】 ちょっと付け加えると、人間を評価する基準を、大学教員は勉強が好きだから、勉強が唯一だと思う傾向があるじゃないですか。とんでもない話で、人間を多様な視点で評価するということは非常に大事なことです。

【大林】 エンカレッジというのは先進国の政策用語なのです。エンカレッジは、残念ながら日本の政策用語になっていないんだ、「励ます」というのは。少なくともアメリカやヨーロッパの文章では「励ます」んですね。だから、ましてや教育の中で、「しかる」ということだけが先行することはなく、やっぱり「励ます」んですよ。そういうエンカレッジと

いう言葉が多用されるというのは、ある意味ではまさに先進国だと思うね。

【中野】「褒めて育てる」という言葉は昔からあるけれども、「しかって枯らす」というのもあるからね。

【池上】 学生から、「私は褒めて育つ学生です」なんて、こんなことを言われると、こっちは頭にくる。(笑)

【大林】 エンカレッジのカレッジの意味がないんだよ。理解がね。褒めて育つときに。「ほめそやかす」という言葉があるぐらいで、日本語ではね。だけど、勇気を持つとか、勇気を醸成していくとか、それを育て上げるというのは、教育の現時点の原点になるんじゃないの。

【中野】 最後に、僕は職場としての神奈川大学経済学部は本当に夢のように楽しい職場でした。

【大林】 良すぎるよ。

【中野】 皆さん方も、後を継ぐ人たちも、素晴らしい職場だと思えるように続けてほしいと思っております。

【司会】 山口先生、先生方にせっかくですからお聞きしたいことはありますか。

【山口】 最初のほうに出てきた、若手教員懇話会というものをおつくりになったということだったんですが、あれはどういうことをされたんですか。

【池上】 冒頭申し上げたけれども、あまり学部の雰囲気が悪くなかったのも、それは雰囲気がよくないと、誰だって気分は悪い。吉田静一先生は確かシスモンディ研究では第一人者だった方ですけども、学外に移られた。あのとき随分外に出た人がいます。それはまずいです。雰囲気がよくないと面白くないですからね、お互いに。それでも教員というのは自分の研究室に戻って、会いたくなければ会わないで済むかも知れませんが。月1回の教授会ぐらいという話になるかもしれないけれども、だけど、お互いにフリートキングとか、いろいろな話をするということができないと、これを言っちゃうと後で言われるんじゃないとか、現実にあったんです、そういうことが。そういうふうになっちゃったら萎縮しちゃうからね。研究者にとって、精神的に萎縮するのは一番よくないと思います。

少なくともわれわれは若い世代のところにおいては、そんなことはないように思ったわけです。あるところのシビアな経験しちゃうと、なかなかそれは簡単に元に戻りませんからね。これは仕方がない、だけど、われわれはそうはいかん。われわれは長く一緒にいるのだから。

【大林】 若手懇談会ができたとき、できたって、大げさにつくったわけではないけど、そういう貼り紙を出したわけだから、周知なんだけれども、そのとき当時の年取った先生が、中には何だというふうな人もいたと思うんですよ。だけど、禁止したり、おまえたちはおかしいとかって、呼びつけて怒るとかいうことはない。ある種寛容ですよ。もちろん中には、おまえたち、よくやったみたいな人もいたけど、それもまた怪しいので、ちょっと注意しなければいけない。(笑) オープンに不満を言うということだね。

【山口】 しかし、それはまさしく大学研究で真剣に皆さん取り組んでおられたということですよ。

【池上】 そうですね。

【大林】 競争観とか、競争、大学間競争の考え方というのを、もっと幅広く考えたらいんじゃないかね。

【山口】 最近はどれだけ就職させるかが1つの目安みたいな感じになっていますけれども、今後、就職教育とか、就職の世話をもっと、そちらにもっと時間を割くべきなのかどうかですけれども、教員のほうが。それについてはどのように考えておられますか。

【池上】 今の学生は就職課に行かない者が多い。マイナビとかリクナビとかを使う学生が多い。そこで社風を知りました。社風を知りましたなんて、「どこで社風が分かったんだ」と言ったら、「ネットで分かりました」と。ネットで社風が分かりますかっていう話があるんだけど。要するに人に会って、いろいろな話を聞くとか、質問するって苦手でしょう、今の学生は。

【大林】 ゼミの学生と話していて、衝撃的な話は、説明会で、特に今年、去年から12月以降になったでしょう。いわゆる解禁がね。そうすると、説明会というのをネットでばっと出したときに、みんなが希

望する会社は一瞬で登録が行くんです。それは携帯では遅い。いわゆる携帯でいいということでもね。だから、スマートフォンに変えないと入り込めない。だから、すさまじいことになっているんだよ。僕はそんな状況に追い込んでいる、一体日本の企業社会はなぜかというふうに、非常に怒りと悲しみを、相変わらずだけ感じる。

一般論として、僕は就職活動の中に、労働法の講座を、企業に対して、われわれこれでやっていますという別に宣伝する必要はないかもしれないけれども、労働法についてしっかり勉強するチャンスというのもつくってほしいと思いますね。みんな、だって知らないんだもの。僕だってよく知らないけど、だけど、大学教員の場合はむしろ知らないほうがいいというぐらいの面もあるから、特にわれわれ失業保険がない時代、ずっと失業保険がなかった。それはいろいろな功罪があるんだけど。とにかく労働法、あるいは労働者の権利とか、そういう幅広い知識をどこかで言わないと、今のうちに、昔の減私奉公とか、何とか奴隷とかいう言い方もあるけど、それでは企業にも役立たないと僕は思うんだよ。本当のことを言うと。ブラック企業とかああいいう話で話が進んじゃうわけでしょう。もっと大学としては、僕は労働法というか、労働法と言うと硬いから、働くこととか、そんなようにね。だから、キャリア教育がこれをやっているかどうかなんだよ、心配は。僕は学部長のときに、キャリア教育導入だったからね。そのことで異議申し立てしたんだけど。

【中野】 キャリアナビにも登録していない人が多いんだよ。

【大林】 登録しない人？ それはある種必然性もあるけど。

【中野】 就職どうのって前に、長引く経済不況のために、アルバイトしている。そこまではいいんだけど、より高い時給を求めて、カラオケや居酒屋の深夜バイトをやって、朝帰ってきて、夕方まで寝ちゃうわけですよ。そうすると、就職ガイダンスも何もないんですよ。そこなんです。大学で何が行われているかが分からない。このようなことが目立っていますよ。

【大林】 そういう事態に対して大学が対応能力を持つかどうか、僕は今後の大学の生き残りの逆のチャンスだと思いますね。それをやっていない。わが大学はこれだけこういうふうに活躍していますというところを話しても、そういう人はどこの大学に行ったってそうなるんですから、むしろ困難にどれだけ対応するかというふうに、ちょっと今日はいい気になって話させていただくと、そういうことだと思いますけど。

【池上】 僕はあえて言うと、さっきの山口さんの話だけでも、われわれは長くいるでしょう、長くいるとゼミ生も多いわけね。卒業生もね。いろいろなところに行っているわけです。だから、私もたまに教師が何を言ったって、あまり聞かないんだから、われわれの就職話なんてリアリティーがないから。卒業生に来てもらって話をしてもらうという。僕なんかありがたいと思うんだけど、さっきの話につながりますが、やっぱり人材は卒業生ですよ。後輩がやっぱりかわいいんですよ。当然と言えば当然ですけどね。だから、言ってみれば会社裏表みたいな話も、もちろん差し障りのない範囲でしようけれども、言ってくれるという、そういうことはやっています。

後は、就職課に来ている求人は、神大生を採りたいために来ているんだから、とにかく行きなさい。いろいろな人と会って、いろいろなことを聞いたり、話をしたりするのは1つの訓練です。今、面接を何次もやるでしょう。4次とか5次ね。黙って口にチャックして行けるはずがないですよ。だから、話すのは嫌だとか、何を聞いていいか分からないなんて論外になります。とにかく就職課に行ってみなさいと。ちょっとした経験とか体験の差で随分違うと思います。

【中野】 われわれ経済学部教員は、ある程度企業社会が分かるわけですよ。ところが、学部によっては全く分からないんですよ。私の友達である他学部の教員に、『日経会社情報』とか『会社四季報』と言ったら、そのベテランの教員が、「中野さん、それは何だよ」って言うんだよ。だから、学生の就職にもっと力を入れるべきかどうかというけれども、学部によっては、それができない教員もいるんです

よ。

もう1つ、研究と教育と就職と、いろいろあるじゃないですか。どれに力を入れるかという、そういう二項分類とか、三項分類の問題じゃないんですよ。それは鈴木芳徳先生がおっしゃったように、その人間が全力で取り組もうとすれば、その人間の全体がボルテージアップして、全部できるんだというんですよ。だから、僕はどちらかという問題ではないと思っています。

幼稚園から授業参観だ、遠足だ、やれ熱を出したなどいろいろあり、小学校、中学校、高校、大学と進学して、高い学費を支払って、挙げ句の果てにフリーターだというのは、本人が一番困るけれど、親御さんに申し訳ないですよ。教員の中には、今言ったようにいろいろな教員がいますが、自分が具体的な指導ができなかったら「就職課に行きなさい」、それでもいいんですよ。そういうことで、おれは知らんぞというような時代状況ではない。それが実態ですよ。

【山口】 中野先生のゼミは、就職率100%を確か誇っていらっしやいましたけれども、何かコツがありますか。

【中野】 36年間のゼミ生は、Ⅰ部、Ⅱ部生を合わせて約900名で、就職できなかったのは2名です。但し、病気などで卒業できなかった人は除きます。就職率で言えば、東大より良いかもしれません。去年も全員決まって、今年も24名全員内定しています。

【山口】 それは特に特別なことをやっているわけでは。

【中野】 まあ、いろいろやっています。

【山口】 それは何ですか。

【中野】 僕の研究室に来ると、中野先生は経済学部の教員じゃない、就職課の職員だと…。(笑)

【池上】 具体的に会社を紹介したりやっているわけ？

【中野】 ゼミ生から就職試験を受けたいと思う会社のリストを提出してもらい、それにコメントを書いて返却します。学生たちは、誰でも名前を知っているような有名企業ばかり、最初はリストアップする傾向があります。消費財関連ばかりでなく、コマースをあまりしない、したがって日本中の学生た

ちにとって知名度の低い生産財関連企業にも眼を向けるように、アドバイスしています。B to CよりB to Bを、ということです。SPIの勉強会や会社で書かせられる作文の添削、自己PRの添削なども行っています。

就職が決まらなければ、卒業論文に打ち込むことは難しいということが僕の持論なのです。逆に、ゼミ生たちは、就職が決まれば、ほとんどのゼミ生は卒業論文に打ち込んでいますよ。

【大林】 僕は中野先生みたいなことは一切やりませんよ。その代わり、僕流に、まさに僕流なんだけど、働く意味とか、少なくとも僕が把握している今日の日本の経済社会の問題とか、そういうことを就職活動の支援として僕は話しているんだけど、それで少なくとも数年前までは大体就職は全部決まっていたわけです。だから、僕は心配していなかった。ところが、この数年間ぐらいの中で、僕がいいなあと思う学生が決まらないことや、絵に描いたようなまじめな学生が、僕にとってはあまり魅力のない学生なんですけど、それが決まらないという傾向が出てきて、だから、結局就職率は100%じゃなくなってきた。だけど、それはもう教員の力ではどうしようもないところがありますよ。だから、その学生と常に接触する。

【中野】 話を聞いてやることね。

【大林】 かつて丹羽邦男先生に言われたんだけど、「学生と時間を共有する時間が長いほどいい教員なんだ」というようなことがある。これは現実では難しいよ。

【池上】 よく言うわ、丹羽先生。(笑)

【大林】 それはそうだけどさ。僕は卒業後のケアがね。ケアといったって、僕は組織化していないんです、OB・OG会を。何々会とか、そういう組織化はしていないんだけど、学年ごとに集まったときに、よかったら呼んでくれと言ってあるんです。結局飲み会ですけどね。そこには出掛けるようにしているんです。そうすると、じわっといろいろな話ができるし、上司・友人と飲むのとは違うこともあるんだと思います。

【中野】 僕のゼミでは、OB・OG会は年に1回やっているけれども、そのほかにOB・OG会サロン

というのをやっていて、そのときよってテーマは変わるわけですが、資格取得をこのように生かしたとか、私の海外経験とか、そういう勉強会をやっていますよ。

【大林】 それは一番オーソドックスですね。僕自身は大学を出た、自分の大学のゼミのOB・OG会って未だにやっているんですよ。それは中国問題をどう捉えるかって、60年代風に特定のテーマで未だにやっているんですけども、それもちょっと、もう時代も違うし、いろいろなことも違うから、できない。もっぱらゼミの同期会、コンパに、私が出席するということですね。あるいは同期会でなくても、任意で何人が集まるから先生、来てちょうだいというときには出掛ける。

【中野】 教員によってニュアンスが違うから、繰り返しになるけれども、その教員によって、例えば就職課に行きなさい、キャリアナビに登録しなさい、この2つだけだって随分違うんですよね。自分のゼミ生の就職に無関心、これは現実的ではないですよ。

【大林】 何となく就職できると考える学生が、われわれが考える以上に多いよ、未だに。

【中野】 そうなのです。やはり、何らなのアドバイスが必要になる。「就職課に行きなさい」、「KUナビに登録しなさい」、それだけでもいいのです。僕みたいに、作文の添削までなくていいんです。

【司会】 そろそろ終了予定の時間が近づいてまいりました。最後に何か付け加えることなどお話いただければと思います。池上先生いかがでしょうか。

【池上】 大それたことは言いませんけれども。冒頭、的場さんのお話がありましたが、こういう形で経貿研での座談会は、要するに学会誌だから、なかなか載せられないような話をするのは、ちょっとどうなのかなと思ったんですが、これからもやるという話なので自由に話をさせてもらいました。なかなか同じ学内、同じ学部にいましても、会う機会もないし、ましてや話す機会も、廊下でちょっとすれ違ったときに、ちょっと二言三言話すぐらいの話で、こういう機会をわれわれは、始めますとエンドレスになっちゃって、いろいろな話がとうとうと出てくるんですね。

【中野】 一晩ぐらいやらないと。

【池上】 一晩ぐらいやらないと。ある意味ではちょっと昔のことを思い出しながら。皆さん今日は、うそ偽りのない話をしたはずなので、最後に遺言なんという言葉が出ましたが、われわれは今現在、三十数年間ここにいて、卒業生をいっぱい輩出してきて、いろいろな行政的なこともやらされた人間が、それなりに意見を持っているということです。それを皆さんのところに伝えることができれば、これは幸いであるというふうに思った次第です。

【司会】 本日は、まさにコンフェッションしていただき、深遠なる叡智と多くの刺激を与えていただきました。残る後輩として、伝統ある経済学部を歴史を担う一員の責務を感じております。ご協力いただき心より感謝申し上げます。